

ミクロネシア学術調査に参加して

佐熊正史

口腔解剖学講座 II

フィールドワークには、所せん運がつきものをつくづく思った。鹿児島大学南方海域研究センターが昭和56年度から継続実施している「オセアニア海域における水陸総合学術調査」第5次（第II期2年次）調査隊、総勢41名が、水産学部所属練習船かごしま丸で、今回の調査目的地であるパラオ共和国とミクロネシア連邦ヤップ島へ向かい、鹿児島港を出発したのは61年11月7日のことであった。私は第3課題班（遺伝と保健衛生）に参加した。班長は今回の調査隊隊長と船医も兼ねる激務の寺師慎一先生と、私の所属教室の大学院生峰和治君と私の3名からなる少数部隊であった。今回の調査目的は、現地の人々の歯列模型を採得し、日本人を含む隣接諸集団と比較検討することにより、歯牙人類学的に見たミクロネシア人の位置づけを行なうことであった。すでに、ミクロネシア人の分類は、形質人類学、言語学、考古学の立場からある程度の仕事が行なわれている。これらの研究業績が、歯の諸形質をもとにした分類と、はたしてどのような違いを見せるのか、あるいは有機的な関連性をもつのかは、以前から興味のあるところであった。

最初の寄港地であるパラオでは、パラオ総合病院歯科のDr. Robertsおよび病院スタッフの友好的な協力のおかげで、パラオ高校生100名を越える上下顎の全顎歯列模型を得ることができ、意気ようようと次の目的地であるヤップ島へと向かったのである。ヤップ島のコロニアへ入港と同時に、現地のカウンターパートである保健福祉局のMr. Jesseと、共同研究の具体的な打ち合わせにさっそく入った。ヤップでの調査はあまり期待できないのではないかという、事前の隊員間の風評をよそに、Mr. Jesseの対応は非常に素晴らしく、短時間のうちに双方すべて了解。「フィールドはヤップ高校にしましょう。校長には私の方から手はずを整えておきます。今週は金曜日がThanksgiving dayで学校は3連休ですから、月曜日の朝8時頃ヤップ高

校に行ってください」との旨であった。パラオに続いてヤップも思いの外うまく事が運びそうだという安堵感も手伝ってか、すっかりこの島が気に入ってしまった。コロニアの町をぶらぶら散歩すると、パラオの主都、コロールとは異なり、男はふんどし1つ、女は腰みの1枚で、悠然と町を歩いており、そこに暮らす住民の素朴で豊かな人間味が膚で感じられるのであった。月曜の朝、さっそく寺師先生を先頭に、ヤップ高校へおもむいた。ヤップ高校校長、Mr. Henreyにひととおりの挨拶をすると、「両親へ調査協力の要請書を生徒に持たしたばかりなので、とりあえず今日は本校の最高学年の生徒から実施して下さい」と校長は言いながら、全生徒の名簿までくれる気配り。仕事場となる保健室に入るとすでに学生がどっと押し寄せてきた。無我夢中で印象採得をしていると、始めて1時間もたった頃、女性事務員がきて「今日はこれでおわりです。明日朝また来て下さい」との旨、まだ8人ぐらいしかサンプリングしていないのに少し妙だなと思いつつ、とりあえずヤップ高校を後にした。

翌朝は、昨日たった8人だったので今日がんばるぞと意気込んで高校に行ったのだが、校長の様子が昨日とは打って変わり、厳しい顔立ちであった。「誠に申し訳ないが、両親の許可が得られそうもないので、1度ヤップ記念病院のコンサルタントと協議してくれ」との事であった。ヤップ記念病院で、アメリカから派遣されている顧問ドクターおよびMr. Jesseに個別に、事のあらましを述べながら折衝をした。結局、寺師班長と出したわれわれの結論は、ヤップでの調査はこれ以上無理である。残念だけれどもあきらめざるを得ないというものであった。それからは、毎日することがなく、他の隊員がそれぞれの専門領域で日々実績を上げているのをよそ目に、ただ帰国の日を待つばかりであった。悪い時には悪い事が重なるもので、折りしもヤップの北東海上に発生した台風がその勢力を増強し

つつあり、このまま発達すれば出航が延期になるかも知れないという噂が隊員の間に広まった。その後、これは現実のものとなり、かごしま丸は約1週間、コロニア港に足止めをくわされたのであった。延期が現実となった翌日、何も仕事ができずしょげている私を見るに見かねてか、寺師先生が「ヤップ高校は無理だったが、他に何か調査できそうなフィールドがあるかも知れない。だめでもともと、もう1度 Mr. Jesse にトライしてみようか」と言ってくださった。翌日、われわれは意を決して Mr. Jesse のオフィスに行った。「私は人類学を専攻しており、ヤップの人々の歯の形に非常に興味をもっている。特に前歯には、われわれモンゴロイドに特有なシャベル形切歯という形質があり、ヤップの人々の歯も、われわれ日本人の形に非常に近いものかも知れない。上の方の前歯なので、ほんの1分くらいで調べられるし、決して痛いものではない、何とかならないか」と一生懸命拝みたおした。寺師先生も「私の方の調査は犠牲にしてもいいから、彼の調査を何とか実現してやってくれないか」と言ってくださった。寺師先生は、血清疫学および実験腫瘍学の研究に長年従事されており、今回の調査も成人T細胞白血病の疫学的研究を目的とされ、具体的な内容は現地の人々から血液をサンプリングすることであった。寺師先生の援護射撃は、自分の仕事が一番相手にいやがられることであり、このことが歯型採取の足かせになっているのではないかと懸念から出たものだった。私は、先生の暖かい配慮に感激した。われわれの熱意が伝わったのか、Mr. Jesse は「良くわかった。では、私の顔のきく村を紹介しましょう。実は私のワイフの出身部落だ。村の名は Meadriich という。酋長には私が話をつけよう」と言って微笑んだ。信じられないくらいうれしい返事であった。これを機に以後の調査はとんとん拍子に事が運び、ヤップ出航の12月11日までには、最低目標数70個を何とか上回る資料を得ることができた。

帰りの船の中で、あの Meadriich 村の最初の村入りの時、村の人々がわれわれを緊張した目つきで遠まきに見ている光景や、時がたつにつれて、お互いに緊張がほぐれ、村を去る時は、私が子供らに教えた日本語の1から10まで数をかぞえる大合唱になった事などが子供たちの底抜けに明るい笑顔とともに思い出された。また、パラオやヤップでのいろいろな出来事が頭の中で整理されるにつれて、わずか450kmたらずの両国の人々の微妙な気質の違いが、おぼろげながらわかりかけてきた。いずれの国も近年アメリカの信託統治領か

ら自立し、新しい国づくりを始めており、ミクロネシア人のおおらかで親日的である基本的な気質は同じでありながら、パラオの人々はヤップに比べておしゃべり好きでオープンであり、総じてアメリカナイズされている。またパラオは、観光や産業も他の国々の人の手をどんどん貸りて、積極的に推進して行こうとする、いわば陽の極にたとえることができる。これに対して、ヤップの人々は、一見無愛相で口数も少なく、どちらかと言えば陰であるといえる。しかし、私の知りあった Mr. Jesse や Meadriich 村の人々もみんなそうであったように、最初はとっつきにくいだが、一端心のふれ合いがあり、お互いの気心が知れると、あの体つきや顔つきからはとうてい想像できないくらい、心やさしい人々であった。ヤップは現在でも、酋長制による身分制度が厳然と守られており、この伝統を重じた国作りを目ざしているように思えた。私の個人的な好みは、ほこり高く素朴で落ちついたヤップ人の方へ、心が少しづつ傾きかけているといえよう。

フィールドワークは、実験研究とは異なり、不確定要素が多数つきまとう。その場、その場に応じた臨機応変な行動力とチャンスを最大に生かすよう努力することがフィールドワークには最低限要求されるのは、今回の主催者である鹿児島大学南方海域研究センターの初代センター長の中尾佐助先生の「秘境ブータン」に詳しいが、今回の調査も、そういう行動が頭の中で考える以前に出なければフィールドワークは成功しにくい事や、実際の現場でそういう行動をとる事の困難さを改めて認識した次第である。

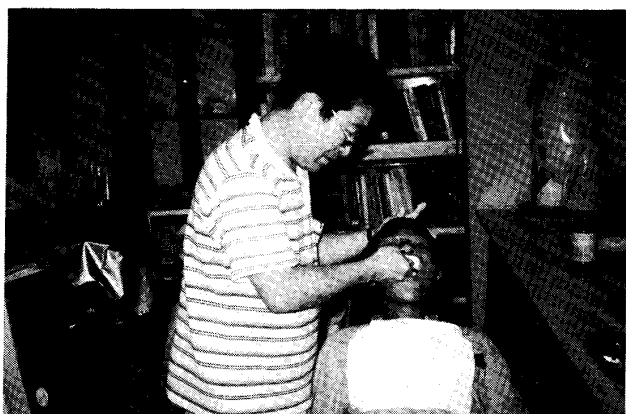


写真1

パラオでの歯型採取中の筆者



写真2

ヤップでの調査隊歓迎の伝統的踊り。踊り子さんはすべて周囲の村人達であり、ゴーギャンの世界を彷彿とさせる。